

第2回 大津市湖都文化推進審議会 会議録（要旨）

1 開催日時 令和8年9月29日（火） 13：30～15：20

2 開催場所 大津市役所 別館2階 321会議室

3 出席者 委員 6名

（金澤委員、中根委員、音羽委員、香水委員、中井委員、今井委員）

事務局 7名

（川島市民部長、木元市民部次長、文化振興課：井上課長、加藤補佐

栗山副参事、山本学芸員、井口学芸員）

計画策定支援業務受託業者 2名

傍聴 なし

4 内 容

1) 開会

2) 会長挨拶

3) 第4次大津市文化振興計画（素案）について

【第4次大津市文化振興計画（素案）について事務局から説明】

【質疑】

○委員 第4章に示されている「場づくり」「人づくり」「魅力づくり」は、第3次計画と基本的な方向性が大きく変わらないように見える。第3次計画の取組を検証し、成果のあった事業をさらに深めるなど、取組の方向にもう少し具体性を持たせた方がよいのではないか。特に人材育成については、育成した人材がコーディネーターとして活躍していく具体的な姿が見えにくい。また、県や他市町、文化関係機関等との連携を強めることで、人材育成等の取組を広げること考えられる。

○事務局 本計画では、まず施策の方向性を示すことを基本としている。5年間の計画期間中、市民ニーズや各事業の評価を踏まえて取組を見直していく必要があるため、具体的な事業までは記載していない。第3次計画で成果のあった取組は継続し、改善が必要なものについては、第4次計画の中で新たな展開を検討して

いきたい。

○委員 計画策定後も、毎年度の進捗を踏まえて取組を修正していくという理解でよいのか。

○事務局 審議会は毎年度開催し、各事業の進捗状況を報告するとともに、委員から意見をいただきながら事業展開を検討していきたい。

○委員 市民アンケートは、興味深い内容である。外国人への案内が不足しているという意見について、北部・西部地域では英語による観光・文化情報を入手しにくいと感じている。多言語を網羅する必要はないが、少なくとも英語で地域の文化や観光資源を適切に説明できる資料を充実させ、地域住民も手に取れるようにしてはどうか。また、北部地域では文化施設へのアクセスが難しく、京都や湖東方面へ出かける方が便利の場合もある。大規模施設に限らず、地域で文化に触れられる機会や場を将来的に検討していただきたい。また、市民が小規模な文化活動を始めようとしても、資金面や申請手續のハードルによって活動が止まることがある。文化活動について相談できる窓口があり、活用できる助成制度の案内や企画内容への助言などを受けられる仕組みがあれば、市民活動の活性化や人づくりにもつながるのではないかな。

○事務局 外国人向け情報について、ホームページ等では多言語対応を進めているものの、現地での表示や紙媒体等は十分でない部分もある。文化施設については、新たな大規模施設の整備は難しい状況にあるため、既存施設を広域的に利用しやすくする視点も重要と考える。市民の文化活動への支援については、文化分野に特化した補助制度は現状では難しいが、市民活動全般を対象とした補助制度や民間財団等の助成情報がある。文化振興課に相談いただいた際には、できる限り必要な情報を提供していきたい。

○委員 国際交流の場や地域の商業・文化拠点が減少する中で、人が集まり、活動する機会そのものが小さくなっているように感じる。子どもの文化活動や部活動の地域移行も含め、市や県がどのように地域の文化活動を支えていくのかという視点が必要ではないかな。

○委員 必ずしも新しい文化施設を整備するということではなく、地域の公共施設等を活用しながら、一定の専門性を持つ人が関わる質の高い文化鑑賞・体験の機会を地域でつくることも考えられる。

- 委員 大津市は南北に長く、市内の移動動線に課題がある。そうした中で「文学のまち大津」を重点的な横断プロジェクトとして位置付け、ブランディングに取り組む方向性には意義がある。「文学のまち大津」の取組を通じて、市民や来訪者がまちの変化を感じられるような取組につなげていただきたい。
- 委員 基本理念にあるように、まず市民一人ひとりが大津にある文化や自然環境に親しみ、その価値を感じる事が重要である。特に子どもが文化芸術を鑑賞し、感じ、表現する機会は十分とは言えない。地域にある文化芸術の原点を見つめ直し、市民自身がその魅力に自信を持って発信できるような取組につなげていただきたい。
- 委員 市内各地域には優れた作品を制作する人や若い表現者が多くいる。地域の文化祭等だけでなく、市全体としてこうした人材を紹介し、市民の目に触れる機会を増やしてはどうか。
- 委員 文化芸術に親しむためには、質の高い作品や専門家に触れる機会も重要である。専門家を招くには謝金や交通費等が必要となるため、小規模な市民グループにとっては負担が大きい。将来的には、こうした企画について対応できる仕組みがあるとよい。
- 委員 外国語による文化情報については、自動翻訳は便利である一方、文化財や専門的な内容では誤訳が生じる可能性がある。公的に発信する情報については、専門家による確認など一定の品質を確保する必要がある。
- 委員 大津は京都に近いこと自体が強みでもあり、京都との位置関係を分かりやすく示しながら、大津にも足を運んでもらう工夫が考えられる。
- 委員 「文学のまち大津」について、令和13年度までにどのような状態を目指すのかが分かる評価目標を示してはどうか。評価目標を具体的にすることで、事業として確実に取り組むべきことも明確になる。今後、大津がどのように変わっていくのかが見えるような目標を設定し、「文学のまち大津」の取組が一過性のものとならず、まちの魅力につながるものにしていただきたい。
- 事務局 「文学のまち大津」については、文化全般の中の文学という位置付けもあり、現時点では文学に特化した指標を本計画には設けていない。別途設置している「文学のまち大津」推進協議会で、現在、目指す姿や具体的な方向性を議論している段階である。一方、第4次計画の評価指標については、施設入場者数等

の単純な数値だけでなく、アンケートを通じて市民の意識や行動の変化を捉える指標を新たに取り入れた点が、第3次計画からの大きな変更点である。

○委員 市民の意識をアンケートで把握する考え方はよい。ただし、施設利用者やLINE等で回答を募る方法では回答者に偏りが生じる可能性がある。地域、年代等の構成をそろえ、毎年できるだけ同じ条件で調査することで、経年変化を把握できる指標にしてはどうか。紙での回答も含め、デジタルに不慣れな人の意見も拾う必要がある。

○委員 アンケート結果の居住地域について、北部・中部等の区分がどの範囲を指すのか分かるよう、定義を示した方がよい。

○事務局 地域区分は学区を単位としており、総合計画等でも用いている区分を基本としている。

○委員 「文学のまち大津」に重点的に取り組むのであれば、予算や取組を継続的に集中させ、最終的に何かが残る事業にしてほしい。文学は必ずしも分かりやすく訴求しやすいテーマではないからこそ、観光、国際交流など他のテーマとも結び付け、若い世代も含めて関わりたくなるきっかけをつくることが重要ではないか。

○委員 文学に関わる書籍や作品がどの程度多言語化されているかを整理することも、国際的な展開を考える一つの手掛かりになるのではないか。

○委員 評価に当たっては、施設を一括りにせず、その役割の違いを踏まえる必要がある。例えば、文化活動の練習・発表の場として利用される施設と、鑑賞を目的に来館する施設では、来館者数の意味が異なる。また、市民自身が行う文化活動と、観客として文化芸術を鑑賞する行動も分けて捉える必要がある。アンケートについても、文化活動に参加している人だけでなく、普段文化施設や催しを利用していない人の意見を把握することが重要である。

○事務局 今回のアンケートは、評価指標を見直す中で、アウトプット指標だけでなく市民の意識等を把握するため、限られた時間と予算の中で実施したものである。地域や年代等をそろえた無作為抽出調査が望ましいことは認識しているが、十分な回答数を確保するには相応の費用が必要となる。今回は施設利用者へのアンケートや市のLINE等を活用して回答数を確保した。今後は、回答者の偏りをできるだけ抑え、継続的な比較ができる調査方法について、予算や時間も

踏まえながら改善を検討していきたい。

- 委員 文化活動に参加していない人に、なぜ参加しないのか、なぜ展覧会等に行かないのかを尋ねることも重要である。情報が届いていない、移動が難しいなどの理由を把握することで、今後の施策につながるのではないかな。

4) 閉会